

ふしぎ  
**不思議なスープ屋さん**  
や

ねこ  
猫おじさんと港のクリスマス  
みなと



ぶん みたに の あ  
文 三谷 乃亜  
え 絵 ねこのうみ ちひろ

ふしぎ  
不思議なスープ屋さん  
ねこ みなと  
～猫おじさんと港のクリスマス～



あるクリスマスイヴの夜のこと

みなと ぞう ぐん  
港の倉庫群はクリスマスイベントで大賑わい

どつろ たたず きぎ  
道路に佇む木々たちもとびっきりにおめかしをして

よる とぼり て  
夜の帳を照らしています

そこに、一人の迷子の少年がいました

かあ とつ  
お母さん、お父さんに連れられ

はじ き おきな こ  
初めてやって来た幼子は

はじ かん ひと なみ  
初めて感じる人の波や

まばゆいばかりの光に

こころ め うつ き  
心も目も移り気になるうち

き つ ひと  
気が付くと独りぼっちになっていました





つめ うみかぜ ほお とお す  
冷たい海風が頬を通り過ぎ

なまり かた しょうねん  
鉛のように固まってしまう少年

いま な かお  
今にも泣きだしそうな顔で

キョロキョロとあたりを見回すと

すこ とお ふ し ぎ やたい き  
少し遠くに不思議な屋台があるのに気がつきました

いってん め のこ ま か はこ  
一点の塗り残しもない、真っ赤な箱

それはさながら巨大なソリのよう

いっしゆん ところ うば しょうねん  
一瞬で心を奪われた少年は

みちび やたい む  
導かれるように屋台へと向かいました。





でむか おお ねこ  
出迎えたのは、大きな猫のおじさん  
きふる ちやいろ うわぎ まと  
着古した茶色い上着を纏い  
あたま けいと ぼうし  
頭には毛糸の帽子をちょこん

これは……<sup>ゆめ</sup>夢？

しょうねん おど なに い だ  
少年は驚きのあまり何も言い出せません  
おじさんは、ささっと身なりを整え  
やわ えがお て ひろ  
柔らかい笑顔で手をふわりと広げました  
「さあさあ。せっかく来たんだ、  
うちのスープを飲<sup>の</sup>んでいかないかい？」

「おや、いらっしゃい。

きみ で あ ぐうぜん  
君と出会えるのは偶然であり、

ひつぜん  
必然だね。」



カウンターにあるちい小さなこくばん黒板には  
『せい聖なるよる夜のうずまきスープ』という文字  
いったい一体、どんなスープなのでしょう  
けんとう見当がつ付かないしょうねん少年のあたま頭もグルグルグルグル……

「これはね、おじさんのじしんさく自信作なんだ。

こしょう胡椒は平気かい？」

ちゅうもん注文うを受けていないのにつく作るきまんまん気満々のおじさん

いきようよう意気揚々となべ鍋の中をなかおたまでまかき混ぜはじ始めました





スープをたっぷりそそぎ

こしょう  
胡椒をパッパ



仕上げにスティックパイをシュツ

「さあ、できた」





「はい、まいどあり」

「チケット一枚と交換しよう」

少年はもじもじし始めました

屋台商品の交換チケットは

お母さんが持っているのです

すると、おじさんは

「ポケットの中に入っていないかい？」

上着の右ポケットを見ながら尋ねました

目線の先を追うように探してみると

不思議な文字が書いてある紙が手の中に一枚

おじさんはスープを持った右手と

パーにした左手を同時に差し出しました







「寒いし、もう誰も来ないからここで飲<sup>の</sup>んでいくかい？」

おじさんは作<sup>さ</sup>業<sup>ぎょう</sup>場<sup>ば</sup>に少年<sup>しょうねん</sup>を招<sup>まね</sup>き入<sup>い</sup>れ

布<sup>ふ</sup>巾<sup>きん</sup>でサツと拭<sup>ふ</sup>いた椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>に座<sup>すわ</sup>らせました

ふうふうと少<sup>すこ</sup>し冷<sup>さ</sup>まして一<sup>ひと</sup>口<sup>くち</sup>

温<sup>あたた</sup>かくて、まろやかで

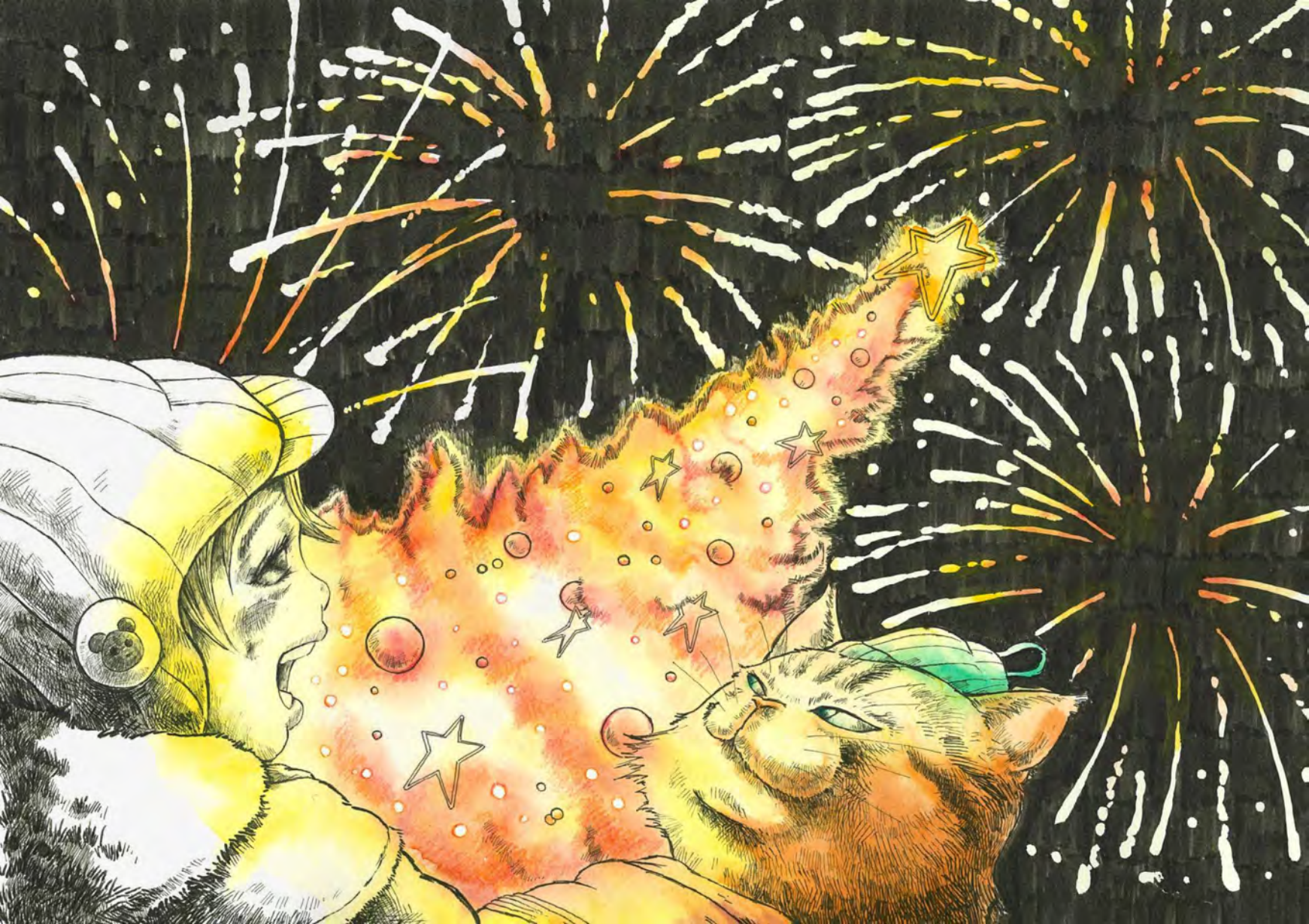
身<sup>からだ</sup>体<sup>こころ</sup>も心<sup>こころ</sup>もほどけてい<sup>い</sup>くよう

カッ<sup>なか</sup>プ<sup>はんぶん</sup>の中<sup>い</sup>が半<sup>か</sup>分<sup>ご</sup>以下<sup>りょう</sup>にな<sup>な</sup>った頃<sup>ころ</sup>

おじさんが愉<sup>ゆ</sup>快<sup>かい</sup>そうに叫<sup>さけ</sup>びました

「ほうら、ツリーが点<sup>てんとう</sup>灯<sup>とう</sup>するよ！」







「おや、お母さんとお父さんが来たみたいだよ」  
少年が耳をすましてみると  
聞き慣れた足音が忙しそうに響いてきます

「そうだ、君と出会えた記念に、さっきのチケットを  
プレゼントしよう。  
他ではどこでも使えないけれど、  
ハンコも一応押しておこうか」  
おじさんは自分の手をペロッと舐め、チケットにボン  
「空いたカップと交換しようかね」  
さっきと真逆の交換会をした二人は  
楽しそうにクスクスと笑い合ったのでした





そと で しょうねん ま  
外に出た少年を待っていたのは  
いき き かんじょう かあ とお  
息を切らしたお母さんとお父さん  
「ひとり はな  
一人で離れちゃダメって言ったでしょう！」  
「でも無事でよかった！」  
ごめんなさいと づぶや  
ごめんなさいと 呟きながら  
いろいろ かんじょう あふ なみだ  
色々な感情が溢れて涙がこぼれます  
バツが わる くなつて うし 後ろを 振り向くと  
おじさんは じっくりと うなず  
おじさんはじっくりと頷き  
『すてき  
『素敵なクリスマスを！』  
こえ だ ささや  
声を出さずに囁いてウインクしたのです

やたい はな さんにな ある た  
屋台を離れ三人で歩き出すと  
ふただ ま こ けんそう  
再び舞い込む喧噪やイルミネーション  
だけど こんど だいじょうぶ  
だけど今度は大丈夫  
かあ とお て はな き  
お母さんとお父さんの手を離さないと決めたから

だけど 気になつて さっきの 屋台を 振り向くと  
そこには ただの 空き地が 広がるだけ  
おも た ど しょうねん み  
思わず立ち止まる少年を見て  
「そういえば、ツリーを見ていなかったね」  
かあ まわ みぎ  
お母さんが回れ右をしてくれました  
すると そら あらわ のは やたい そっくりの ま か  
すると空に現れたのは屋台そっくりの真っ赤なソリ  
さんびき ひ ゆうゆう と  
三匹のトナカイに引かれて悠々と飛んでいます  
『またいつか 会おう！』  
こえ き き  
おじさんの声が聞こえた気がしました





